

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：32305

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25590128

研究課題名(和文)生涯発達から見る 貧困化 のプロセス：参与観察に基づくボトムアップ的貧困研究

研究課題名(英文)Research on poverty from the viewpoint of life-span development

研究代表者

宮内 洋(MIYAUCHI, Hiroshi)

高崎健康福祉大学・人間発達学部・准教授

研究者番号：30337084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：メンバーによる福島県・愛知県・沖縄県等の各地での各発達段階期を念頭に置いたフィールドワーク・社会調査の一方で、メンバー全員によって国内における貧困調査の先行研究を再検討した結果、「貧困」の理解が、過去の研究者自らの生活に基づいた価値観からの道徳的断罪と言えるような段階で止まっているとしか思えないものが多いと気づかされた。「貧困」を調べる側が道徳的断罪などをしてはならず、センシティブなりフレキシビリティを意識しながら、貧困状態の生活・文脈の理解が貧困研究には第一に求められるべきであることがさらに理解できた。

研究成果の概要(英文)：Through the survey and the ethnography study of the populations who are trapped under the poor living conditions in Fukushima, Aichi, and Okinawa, and critical reviews on literatures regarding poverty in Japan, this project raised a different picture of modes and forms of poverty. Most of the previous studies concentrates on moral aspects of the dispossessed, which might be reflected a conventional doxa maintained by the scholars. This project found a different way of which scientists need to conduct their research with reflexivity carefully to rupture common knowledge tied with moral discourse. It is elucidated that the studies on poverty need to capture the embedded ways of impoverished conditions appeared in living context of the dispossessed.

研究分野：社会学，臨床心理学

キーワード：貧困 生涯発達 フィールドワーク 若者 公営住宅 学校 クリティーク

1. 研究開始当初の背景

まず、本研究の研究代表者である宮内は、『発達心理学研究』編集委員会から依頼され、当該誌に「貧困と排除の発達心理学序説」(宮内 2012)を発表した。そこでは、かつて北海道大学教育学部における学際的研究グループによって進められていた「貧困と子ども」に関する研究の一部を紹介しながら、歴史学やルポルタージュの知見も用いて、生涯発達と貧困との関係についての考察をおこなった。具体的には、人間の発達における各ステージのうち、誕生から児童期まで(胎児期、新生児・乳児期、幼児期、児童期)に限定し、この各ステージにおいて、貧困が各々の子どもの発達にどのようにかかわっている可能性があるのかについて、生活環境を中心にして考察をおこなった。苅谷剛彦が再評価した、かつての北海道大学教育学部における学際的研究グループの取り組み以降、貧困に関する研究は、少なくとも発達心理学の領域ではごく少数に限られる。

そこで、生涯発達を視野に入れた実証的な貧困研究が今後、その他の領域についても求められると考え、新進気鋭の社会学者とともに、挑戦的萌芽研究(平成 25~27 年度)に応募した。

2. 研究の目的

本研究「生涯発達から見る 貧困化のプロセス」の目的は、貧困研究の深化にある。阿部彩の研究をはじめ、日本国内における相対的貧困の拡大はマクロなデータによって示されている。北海道大学教育学部を中心とする研究グループをはじめとして、丁寧な量的な調査も実施されており、質の高いデータも揃えられている。しかし、研究者自身が貧困の実態に分け入った参与観察に基づく知見は現在、乏しいと言わざるを得ない。研究代表者を務める宮内洋が指摘したように(宮内 2012)各個人における貧困の影響はその年齢によって異なる。そこで、各地域において、子ども期、青年期、老年期の三つの段階における参与観察に基づく質的調査をおこない、これまでの貧困研究をより微細な視点からさらに発展させる。

3. 研究の方法

本研究の独自性にもかかわるが、「職人芸」などと揶揄されるフィールドワークのみならず、メンバー全員による研究会を定期的におこない、【各自のフィールドワーク 研究会における議論と振り返り 各自のフィールドワーク 研究会における議論と振り返り …】というサイクルによって、本研究を進めていく。このようなサイクルを繰り返すことによって、フィールドワークのブラックボックス化を避けることができるだろう。重要な点は、そのメンバーである。信頼たり得るメンバーであることは当然のことであるが、全員が密度の濃いフィールドワーカー

であることから、各フィールドワークにおける様々な文脈までもが理解が可能であり、より深い議論をおこなうことができる。さらに、本研究には自費による助走期間があり、メンバー間の信頼関係はすでに形成されている。

4. 研究成果

(1)まず、本研究の基盤となるのは、各々のメンバーによる各々のフィールドワーク・社会調査である。その成果は、以下の通りである。

なお、研究代表者である宮内は、群馬県内の小学校を中心に、貧困家庭の児童のサポートを教育実践に取り入れるために、教員とともにアクションリサーチをおこなった。同時に、本研究の研究統括者、そして臨床発達心理士という専門性のもと、各メンバーの研究成果に対して、スーパーヴァイザーとしての役割を担った。

研究分担者である松宮は、愛知県名古屋市、西尾市、豊田市、豊橋市、大府市、刈谷市、愛西市、京都府京都市、神奈川県大和市、埼玉県川口市の公営住宅を中心に、高齢者、外国籍住民の社会的孤立に関する調査を実施した。ここでは、相対的な貧困層の社会的孤立状況の実態を明らかにするとともに、それぞれの地域特性を踏まえた地域間比較分析と、西尾市、豊田市、大府市における参与観察を踏まえ、孤立を解消する地域参画のあり方について分析を進めた。

研究分担者である新藤は、福島県泉崎村を対象に、教職員に対する子どもの貧困に関する研修について聞き取り調査を行った。ここからは、(1)この取り組みは、就学援助制度に関する説明を主としていること、(2)教員については、就学援助制度について十分に把握していないことが多いこと、(3)保護者の所得のデータなどが得にくく、就学援助の対象者の把握が難しいなかでは、日々子どもの様子を把握している教員が重要な存在となることなどが明らかとなった。

研究分担者である石岡は、フィールドワークの方法論について、海外の研究動向を踏まえながら深めていった。社会理論を検証する手法でも、また逆に、素朴に実証主義を採用する手法でもなく、フィールドワークの具体的記述が同時に理論的に構成されているような相互性を備えた方法論を探究した。

研究分担者である打越は、沖縄の下層若者を対象とする参与観察調査と生活史インタビューを実施した。彼らの多くは、主に建築業、風俗経営業、違法就労業に就いている。それは、本土の流動的な就労と個人化した生活世界にある下層若者とは対照的に、非移動の強固なつながりに生きている。そのようなつながりのあり方を「地元つながり」とし、

彼らが不安定で過酷な労働世界にとどまるもうひとつの合理性の理解を試みた。

(2) 上記の各自のフィールドワーク・社会調査の一方で、私たち研究グループは実験的な試みを3年間以上にわたって継続してきた。社会科学領域の共同研究は、各メンバーが独自に調査・研究活動を実施することが多くなりがちであるが、私たち研究グループは、日常的なメールでの情報交換と議論の他に、2ヶ月に一度は一堂に会し、これまでのフィールドワークによる知見をぶつけ合いながら議論する研究会を必ず開いてきた。そこでは、上記のような各々のメンバーの社会調査・フィールドワークの成果発表の他に、先行研究の詳細な検討を通すことによって、本研究の視角等もより厳密化していった。このことによって、各メンバーが自らの研究を相対化することができた。そのプロセスの中で、共同研究者全員で、日本国内における研究者自身が生身の身体をもって貧困の実態に分け入った参与観察や社会調査に基づく知見を丁寧に検討し、何度も真摯に議論を重ねることによって、3つの共著論文(以下の雑誌論文の)を生み出すことができた。現在も「貧困調査のクリティーク(3)」を準備中である。今後また予定調和的な調査研究ではなく、共同研究者各自の生身の身体による参与観察は、これまでの研究者の前提を揺るがすような発見をもたらすことだろう。ここから貧困に関わる新たな知見が導き出されることが予想できる。

さらに、密度の濃いフィールドワーク・社会調査をおこなってきた各メンバーを統括する研究代表者は、その著書『体験と経験のフィールドワーク』においても、臨床発達心理学的な視点の重要性を指摘し、日常的に臨床活動もおこなっている。他の研究分担者も、教育学、社会福祉学など実践的関心が強い領域とのかかわりが深く、社会学領域のみに閉じた研究ではなく、今後はさらに、貧困問題に対する実践的手法を導き出し、社会に貢献できるであろう。

最後に、本研究の期間終了後となるが、2016年6月5日に琉球大学にて開催された日本子ども社会学会第23回大会において、研究代表者である宮内が企画者・司会・ファシリテーターとして、話題提供者に本研究の研究分担者である打越正行と上間陽子氏、そして指定討論者として同じく研究分担者である新藤慶をお招きし、ラウンドテーブル「子どもの貧困：沖縄における若年層をもとに」を開催することができた。国内各地から貧困にかかわる研究者が参加していただき、きわめて重要な議論が出来たことは付け加えない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計46件)

宮内洋、貧困調査とトラウマ：もう一つの『まなざしの地獄』、理論と動態、査読有、8号、2015、129-142

宮内洋・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行、貧困調査のクリティーク(2)：『排除する社会・排除に抗する学校』から考える、北海道大学大学院教育学研究院紀要、査読無、122号、2015、49-91
<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/59469>

石岡丈昇、マニラのスクオッター強制撤去-慣習行動の強制再編について、理論と動態、査読有、8号、2015、110-127

Tomonori Ishioka、How Can One be a Boxer? : Pain and Pleasure in a Manila's Boxing Camp、International Journal of Japanese Sociology、査読有、24、2015、92-105

打越正行、暴力を飼い慣らす 沖縄の下層若者の生活実践から、生活指導研究、査読無、32、2015、13-23

松宮朝、結節点としての喫茶店、愛知県立大学教育福祉学部紀要、査読無、63号、2015、75-88

新藤慶、産炭地における子どもの姿と教育実践 1950年代～1960年代前半の研究をもとにして、群馬大学教育実践研究、査読有、32号、2015、123-134

宮内洋・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行、貧困調査のクリティーク(1)-『豊かさの底辺に生きる』再考、北海道大学大学院教育学研究院紀要、査読無、120号、2014、199-230
<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/56433>

宮内洋・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行、新たな貧困調査の構想のために - 日本国内の貧困研究の再検討から -、愛知県立大学教育福祉学部論集、査読無、62号、2014、123-135

松宮朝、孤独死」「孤立死」に対する地域の取り組み、国民生活、査読無、23号、2014、15-16

宮内洋、フィールドワークにおける葛藤、

社会と調査、査読無、11号、2013、48-55

松宮朝、コミュニティと排除(下) 人間発達学研究、査読有、5号、2014、43-52

Tomonori Ishioka、Boxing, Poverty, Foreseeability: An ethnographic account of local boxers in Metro Manila, Philippines、Asia Pacific Journal of Sport and Social Science、査読有、1-2号、2013、143-155

石岡丈昇、ブルデューの強制移住論 根こぎの形成をめぐる方法的予備考察、理論と動態、査読有、6号、2013、1-12

石岡丈昇、スクオッターの生活実践 マニラの貧困世界のダイナミズム、シノドス、査読無、2013年9月12日号、2013

打越正行、建築業から風俗営業へ 沖縄のある若者の生活史と 地元 つながり、解放社会学研究、査読有、26号、2013、35-58

後藤俊文・打越正行・吉田舞、Goodwin, Jeff and Ruth Horowitz, 2002, "Introduction: The Methodological Strengths and Dilemmas of Qualitative Sociology", Qualitative Sociology, 25(1) 質的調査法をめぐる諸論点、現代社会学、査読有、14号、2013、33-43

[学会発表](計24件)

宮内洋、生活-文脈主義から見る保育現場への参入、日本質的心理学会第12回大会一般公開シンポジウム、2015年10月03日、宮城教育大学(宮城県)

松宮朝、地方消滅論に都市はどのように向き合うか、日本社会学会テーマセッション報告、2015年09月19日、早稲田大学(東京都)

Tomonori Ishioka、Ethnographic Fieldwork in Japan、"Qualitative Methodengespräche"(招待講演)(国際学会)、2015年05月29日、Ludwig-Maximilians-Universität、München、München

打越正行、暴力を統制する 沖縄の下層若者の生活実践から、第32回日本生活指導学会、2014年08月30日、沖縄大学(沖縄県)

松宮朝、愛知県西尾市におけるブラジル人コミュニティと教育支援、移民政策学会2013年度冬季大会シンポジウム報告、2013年12月14日、静岡文化芸術大学(静岡県)

Tomonori Ishioka、Underdog Boxers as Social Products: How Nameless Filipino Pugilists Constitute the Bottom of the Asian Boxing Market、International Sociology of Sport Association 10th World Congress、2013年06月13日、Renaissance Vancouver Harbourside Hotel、Canada

石岡丈昇、貧困の刻印 ボクシングジムから見るマニラの都市底辺、日本社会学会第86回大会招待講演(招待講演)、2013年10月12日、慶應義塾大学(東京都)

打越正行、沖縄的共同性と階層(1) 排除されるヤンキーの若者たち、第86回日本社会学会一般研究報告、2013年10月12日、慶應義塾大学(東京都)

打越正行・上間陽子、キャバ嬢になること 沖縄<夜シゴト>で働く女性たち、第65回日本教育社会学会一般研究報告、2013年09月27日、埼玉大学(埼玉県)

大野更紗・日高友郎・水月昭道・宮内洋・やまだようこ、「当事者」だからこそ語れること、語れないこと-「当事者」という概念の再考に向けて、日本質的心理学会第10回大会一般公開シンポジウム、2013年09月01日、立命館大学(京都府)

齊藤こずゑ・西野博之・牧真吉・谷口明子・宮内洋・菅野幸恵、子どもたちの「いま」をとらえる-オルタナティブな子ども観の創造-、日本質的心理学会第10回大会質的心理学研究編集委員会企画シンポジウム、2013年09月01日、立命館大学(京都府)

[図書](計12件)

斎藤清二・山田富秋・本山法子編、新曜社、インタビューという実践、2014、196(129-148)

谷富夫・安藤由美・野入直美編、ミネルヴァ書房、持続と変容の沖縄社会 沖縄的なものの現在、2014、320-304(108-131)

日本子ども社会学会研究刊行委員会編、ハーベスト社、子ども問題事典、2013、257(60-61)

中筋直哉・五十嵐泰正編、ミネルヴァ書房、よくわかる都市社会学、2013、216(10-11)(44-45)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮内 洋 (MIYAUCHI, Hiroshi)
高崎健康福祉大学・人間発達学部・准教授

研究者番号：30337084

(2)研究分担者

松宮 朝 (MATSUMIYA, Ashita)
愛知県立大学・教育福祉学部・准教授
研究者番号：10322778

新藤 慶 (SHINDOU, Kei)
群馬大学・教育学部・准教授
研究者番号：80455047

石岡 丈昇 (ISHIOKA, Tomonori)
北海道大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：10515472

打越 正行 (UCHIKOSHI, Masayuki)
特定非営利活動法人社会理論・動態研究所
・研究員
研究者番号：30601801